

ワイングラス 様

愛用マシン: COSTURA 767DB / トピアエース 802 型

OVERLOCK MACHINE 872-JL

マシンと私

家庭科室にリズミカルなマシンの音が響きわたります。


初めてマシンを教材に取り上げたころは足踏みマシンと、それにモーターを取り付けて電動式にしたものが混在していました。足踏みマシンは電源がない所でも使用できる利点がある反面、一番大変なのが空回りをすることでした。長いベルトが緩むのは仕方がないとしても、前進するにはちょっとしたコツがあり、はずみ車を回しながら足踏みとの絶妙なタイミングが必要となるからです、なかなか縫うまでに至らず、これが子ども達にとってかなりハードルが高く厳しかったことを覚えています。

その後、徐々に足踏みマシンは姿を消し、一部モーター付きのマシンという形で残ってはいるものの、全てが電動マシンに変わりました。

学校の教材として扱うマシンは新設の学校でない限り、予算の関係上メーカーや型が揃っていません。特に新機種のマシンに切り替えたくてもせいぜい1年に1、2台ぐらいしか購入できず、どの学校でも5、6種類のバラバラのマシンを使っているのが現状です。

「例え型が違っていてもマシンの原理はみな同じです」

授業中つねづね言ったものでした。



小学校では班に 1 台、全部で 5、6 台のミシンが必要ですが、中学校では班に 2、3 台、全部で 15、6 台を同時に使います。そのため、電源の確保を延長コードで対応し、壁や天井のコンセントからもとらなければならず苦勞していました。

また、ミシンは家庭科で唯一の『機械』の教材です。コントローラーの踏み加減は自動車運転と同じで、アクセルやブレーキにもなります。また、自分の手で縫う方向を操作できることは、まるでハンドル操作のようで、特に男子達はとても意欲的に取り組んでいました。

しかし子ども達はたびたび

「ミシンが壊れた。縫えない」

と言ってきます。そんなはずはありません。たいていは上糸や下糸、針などの基本的な扱いができていないことが原因でした。足踏みミシンを見せながら

「古いミシンでも、使い方次第で長く使えます」

と、話すことがしばしばありました。

授業中、いつも大小のドライバーを持ちながら家庭科室を駆けずり回ったことを記憶しています。

その後、一段と軽くなった卓上型のポータブルミシンが登場し、水平ガマも普及した今ではロックミシンやコンピュータミシンまでも教科書に載るようになりました。

ミシンはとても便利であり、それほど複雑な構造をしていません。老若男女を問わず、誰でも綺麗に速く縫うことができる手軽な機械です。

古希を過ぎた私の部屋からは、今日も聞き慣れたミシンの音が聞こえてきます。ホッとするこの音は、物づくりの原点であり、いつまでもこの軽やかな響きが続きますように願っています。

